



1369
16止

珠海英聞卷之十五

雜事

我如深...
是如...
人...
...
...

環海異聞卷之十五

雜事



宮初漂了名せしオンドレイツケとソム島を始て
見出しオロミアれ手小属せしハ「セリコフ」と云
人なりけ人語抄通歴おきつるおなしとくムスクワ
産れの若なりイルコーツカよて去知、年病死
五十二三ときけと仍て思ふ小太れ島を侮せし

三十年も前の事を述べてはセリコフといふ者十三
日某より十七八日迄をキセロフの父某う代ふる事
の事一々考考たり生利考考して歴々出せ
一途不商考方の審察をなすキセロフが手紙
オホーツカカミシヤーツカれあ港仕出の船に乗
て且りし内初てナーツカ派石出の船を考考せ
て家子を伺ひしに夥る海獣の漁桶ある場
所と云文りぬる所此れと生次考考相傳るを王上へ

も告訴して再び農航し、此處を懐き手を入む
と此地よりぬ時ふ島人、名馴るさる所、人衆
とを怪しみ漁桶より、孫教百本を擲ちて
船中へおかけしを舟子共、此を信まらぬ許多
怪我せし者も出来たふあくみしふセリコフ謀
略を以て漸々大事といひ論し、島山存する事と
して遂に、今此れ、手附考考悦後せしむる事
考考し、是は以後、本島より、船往來し、交易ふ

撥^ヒ取^ラの物を些^シに極多に黠皮と貢納せし
むるふ取^リ追^ヒて其地^ノに領^スと建^テて後^ノ人を奪^ヒ
二ヶ年ふ一過^ツて交代し信^ト物を送^リ黠皮を
送^リたるふと^シを^シ

おセリコフを^シけ^テ備^エの^レ後^ニ大^ニ切^リふ^リありて王^{カミ}上^ノ
俸^給官^職を賜^ヒて家^ノ富^ミ榮^ヘ今^ハキセロフ共
肩^ヲを^シけ^テ程^ノの富^豪とな^ルスド、ミ^リラ^ノの^上
なりと人^ノと^テ其^レ稱^セりしと^シスドミ^リラ^ニハ^ハ百万と

いふ事なり然^レもキセロフを恩^顧の^家あり
同^家れ^手を^シ極^メて^シ徳^不高^貴並^ニふ^レた^レ徳^不
高^貴へ送^リる^レ交易^代物^等もキセロフ共^ニあ^リて
後^方り^テ然^レも^シ年^々ふ^シ十^餘年^を過^シて病^死あり^テ相
高^人中^ノ百^レれ^ル者^ノ約^シキセロフ^ノ勢^強く^シて
た^るを^シ極^メて^シ大^ニ高^中方^をを^シ者^むし^テり^ルも
セ^リコ^フを^シ世^に内^に彼^ノ手^にあ^りて是^を極^メ
者^内評^のこ^りあり^てあ^りし^のセ^リコ^フ死^去れ^ル極^メ

私かして何れも中念せはるふキセロフをハその
申百を除きありけり前存キセロフが仕立られ
先キくくそり遠出来又を年オホーツカより
北アメリカに仕立せし、船内航せす二年と経
ても行方志れなき事あり甚怪しき事ありし
皆彼奸人共の所為なりやと物ひはれりや
と書

は交渡ある事ヲアツカより送るて申玉へ海航

せし私共ハ船内セリコフ「が手は書ありしといル
コイツカへ送せしはハ己ハセリコフ泉ありとありしと
あつてもなるなり船内は海航ありありあり今早
あつた女子を人あるのうそに船内航せし者ありしと
今ハ海航ありしとムスクワハ川越し一居住すと扱
け女不所持しそ多くの貨物も大なるつひに書あり
鳴なり船内は夫の物ありて王上ハの書ありし
引續き船内は自中よりありしとありしと

ナアツカ在島のカロシア人五六十歳を名乗る人
先年は島へ初て渡りし時島人より蒙りたる稔^{モリ}
瘧の痕ありしを瘧を出して見せ又セリコフも五十
歳少く飯を死せしときけい島の彼子屬せし
を名乗るはいつしと云ふ

カミシヤーツカより松原の方第十八日乃島より
カロシア人の顔ありをせり、島の酋長をワシライ
といひては人セリコフと名を請ふと經りし人

ちりしを

大麦^{エチ} 挽割しして食ふ^{マシラ} を加へ煮食ふ

米^{イタカキ} 食ふ事何もある所たすく用由米食、裸麦

^{アリの}蒸餅^{ケレブ}を用由四考ふよそ豊作の時、銅貨十

ハ錢山作の年、五十錢より百錢を去る酒成の

年、大不作ありしり或るは拾錢より二百錢を去る

買せり小麦^{セニイ} 冬を去る年、或は拾錢程ある

右の年、大小麦共ふは種不稔しして價高かりし

お小麦の粉やして蒸餅ケレブを作て糸日おふ煮し
常にお用ひす蕎麦の挽割やして蕎麦以外の
穀類より一二縵も價を少し挽割並ふ粉の類
水車は臼を用て挽ヒカするなりイルコーツカより
都府にのその中カラスナヤリツケの邊よりカサシマ風扇
を用ゆしん由踏傍高ミチハタ変お仕おてあるを不
よく見ゆミチハタ 圖九と書お見申
漂客も富高キセロフダ許お借もしてありし内

ザイモリヨバイカル湖といふ大湖へ漁獲ふをす
ありた年々人々加へて行きふは湖水の漁
場をイルコーツカより南におへて千里程あり
され彼里教をり又七百里程をりしよ
日本里教をりしるるをふいしよイルコーツカ近傍の地
地を湖より漁る魚類を多く用ゆキセロフ大金
を出しそきて他の商人申る共お彼湖へ網
おの獲ふやふより大獲るる成の年のふなり
三月をりしした年々も其人教は加へて考ふ

川船を人敷七十人とりあて船三艘漕出せり
大船の舟へ小船
南へ向ひ六十里あるれ湖水の北
をちつて入る

此方ふあさきあきとニコライといふ地なり
寺は「ニコ
ライ」チユート

ホリと
いふはあより湖水へ船を
入るをいふなり
あふ向ひ

山は湖時を川舟にして七百里のき
アングリツケ

國ふんちウア
南きの湖時を
とりあふは
道程高山を
悉く

石山あり或はのちり
或はくちり
嶮岨を越して
あは

あふ船を牽きつけ
あふを
あふ船して
三

十一日を経て
あふ岸なり
あふり
あふと
あふ

網をもち
あふ中
あふ船
あふを
あふ

あふ川網をり
地川の
あふり
あふり
あふり

あふり
あふり
あふり
あふり
あふり

あふり
あふり
あふり
あふり
あふり

拔^バ乙^イ給^カ鹿^ル湖
漁桶圖



又坊ふと加つてお網してオシヤテレナといふ大魚
或属を指さうと一尾大なるもの、松島岩目あり
これ亦此ふ裁ち切り様ふ、後松漬お志さうして
シヤテイと呼びて明禁ふ似る物なり
按硝石^{セシヤ}の類なり
塩と拌き、合せて魚と漬けるなり、如此の大魚は
ニ味調合のおおき、後松漬肉裏に透徹せす
とをりは、おめて、漬け貯め、幾年経ても腐敗す
らぬ、なまきと也、けおめてもオ、モリ魚等も又夥く

網ふ入りしうとも塩と入物ふ限りあり、
お網と留め、大塩漬の糟と煮、
帆せし、六月や七月、本所ふ留めす

相湖時ふトゴスといふ種族の人類あり、
等は、地面取、船を、銀五十枚、
又百五十枚と、運上と、出、
網おあり

ニコライ河原の向ふあり、
此の湖時より水と、
隔てあり、
南湖を、
湖上六十里、
舟を、
海と

山越の陸行は甚だ不便なり蒙古の漢地に入るの

道中をよりいふ冬月湖水一面を氷つたるをよみ

ケタイスコイ 漢地 より商物の通路氷の上を海

通るといふ又よみよりイルコツカをこの川筋も氷

たりはあつた氷上を往來し通路甚便利なりと

いふ暖冬の食糧通商の南の湖を山を越す

沿ひ廻るといふ所の湖越へ出るより三百里と経て

ニコライ河を過る東の甚迂をなると経支那境へ

七百里といふ 我部より

は湖水を赤くし中を山もあり長さサ彼里法より一千

里 湖水の 一河といふ岸より湖源より也 國の水を赤くする事あり

此湖群の上手よりホノアングリツケといふ地の近傍より

信むる族の印トングスなりは古昔定れる事あり

時よりいふ所を移すは事作よりいふ事の本材を

たてあつた舟より櫂の皮と引廻し用ひすは廠

の正中は櫂の本を架し自在より手物と下け繩

トングスナシ獲を足すまゝにして能射留るといふオロミイア
乃領地とありし海軍は此は野首す後ては首をた
立のもの且土地の各緯度ふアマガリツケハオロミイア
よき後人ニ人立勅出る也

トングスナ異形の佛像を崇奉す皆鍬を作物
又假面作りて遊ぶ事くもアマガリツケハ鍬治あり
此佛像亦彼を鍬又物とも作物を也

トングス等々衣服イルコーツカを以て求む皮求衣
并羅紗類の服を忌用す男女共々時々イルコーツカ
ハナレを調書するに往來す

漁獲の百皆アマガリツケハ小魚をおち能任せし
内キトングス等二十人共來りたおもハるめく此を
作すそ位ありたれハ此方き漁りし魚類をわいひ
るんとしてこれを川網のち百ハ雇へとお保れハ手
百錢を言ふておふふありす性懶惰且貪欲あり
若たよてた今もこのいひありしと

射術を射て見せし射術を至て感んせし
前ふしつうたし

かそ皆く在位は物世をすはは彼トコス世又
何方へ飛ぶを移せり

アマガリツケの内は河あり 名不詳圖を按み 大北川
アマガラ河あり

アモル 是即支那西徇 とし川を合しオロシイア領と
黒龍江

ケタイスコイ 支那の領分境をあるといふ

バイカル湖より水源をある川を多し、其内沙子

五百里の百ヤーツカに流る川あり又イルコーツカに

流る川ありニコライキに湖ありの出る口のあるり

又トホリツカの方へなる川ありといふ其内ある川も

あるありし

イルコーツカ滞留中しはは年月は忘れり日

蝕ふらうりかあるあり土地の人を交ふ氣

付ず候ふをよそは測るしよふもほしあや

インペラトリ 帝爵 の國は世界の中心にあり

の名、覺へ留す一ツハオロシイスコイ 魯西亜ニツ

ヤツホンスコイ 日本 ニツハタタイスコイ 支那あり

とて

茂受按之一ツハ入ル瑪泥亜 エルマニア 歐邏巴洲に係る 一大國なり和

一名子イメツカ魯西亜のて子イメツと呼ぶし ホーゴドイツ 又ドイツランドといふ あまし

は館都児格 ツル 魯西亜ハドンツコイ又トロツカ 又オトマンスコイといふ

應帝亜 インデア 魯西亜ハイン ゼイスコイといふ 冬帝弼をうとびり

大莫卧兒 モール といふ 皇都 あり 元を六ヶ所ありと我

日本ハ異域ニ比すれば土壤狭小也といふ

皇統一世萬古不易帝爵の國弼ありて

他の諸邦は優劣の外の域外を言重畏

服する所以なり往年及びし伊勢光女史

は友の源ありきも彼玉の令常といふ

查國ハ土地ハ狭小なれどもインペラトリは玉

たよりと稱員せしきけり

先年光女史等と復送し相前を來りしアダム

キリロイチラツクスマンを先年ペトルブルカで病死
せることいふは文キリロイチを去已年都ペトル
ブルカの
帰途トオリツカといふ所で病死せりけ人種は
昆虫を捕さしめて干し鞆く乾し蜜ろうと一餅
学共なるとの噂あをを聞きし其子ラツクスマン乃
死すに其母の事なりと

按ふキリロイチは先年を厚く母信やきし
人ときけり都へる由を聞きし其母同是し

女帝は留胡の教をも信しつたせりと學識
をもて母を敬愛を好むるとかは業王命を
文ししをり先年をオホツカを送り來
りし及も採藥せりと昆虫をとりめし
のこは東よりしは云ふて宮の物産家といふ
事あり

升といふのを見文す奉物おそ目奉をう何
が一切様さうけて奉るなり

博奕の玉中屋は法度あり私より戯むるを云ふ
名をカルタといふ札数三十六枚あり男女の人形
ありありカルタイケライといふかきこをうるといふ
なり日本にありカルタを伴帳の時南亞墨利加
にてポロトガリ人形路ふを見たりされ今我より
在る物と同一し

按てポロトガリハポルチガル 波ル杜尾ル 我

邦よりホルトカル 又云く南蠻 たり即耶蘇教

法を弘め来りしをいへる一カルタと云
おて牌又圖版の事なり一歐羅巴洲中通用の
辞なりと今法國博奕の一冊なりと通称
を我方より耶蘇會士の造り一其器あり
儀事等に人の帆の如く國帝より各賜り被時計
都府より作り給なりと云

は袂時計に箇片は皆献呈せん事を請ひ
しふは中一箇をとりぬれて三箇は皆返し

終るる 首受 大ぬを披き 生肉を不焼く

トバイレイ ロンドン 二万六千八百六十四

Thobajley London 26864

といふ教十字を彫り付あり 突云を他ハ弁す

くすといふも ロンドン 籠動とあるハ 漢又利亞の

都府をうけ 教籠動 製衣の物 何系 既指 海も

鞆くあり 今く 漢又利亞 細工と云ふ

國人 認根付 時計を 操ふつきて 指をうけ 糸糸ふ

白く 時刻を 知るなり

漂人等 新都の名 波ビゼルボルカといふ 物くペトル

ブルカと 少くあり 故押して 大れを 操す 彼人ハペトル

ブルカと 称す 多くビゼルボルカを 裁く 鞆て 中す 糸

なるといひ 糸あり 中編 皆ペトルブルカと 記せり

按よ 糸糸あり 靴トルヘルクといふ

ペトルブルカの 都へ 諸系 糸の人 来り 指をいふ 糸

地名と 少くあり タルタ 鞆而 鞆 子イメツ 入ホ 瑪泥 糸

カラシツケ 和蘭 アンゲリ 漢又利亞 ダレタケ 糸那 瑪糸加

スウェーデン スウェーデン 雪降^{スウェーデン}の難^{スウェーデン}元^{スウェーデン}七十七ヶ玉の人と来り

集り旅^{スウェーデン}宿するも、つらまじ、氷^{スウェーデン}位^{スウェーデン}の者もあるが、幾干
とつらまじを志し、往^{スウェーデン}を志し、是等と引合せしれ出會^{スウェーデン}
るも、形^{スウェーデン}又服飾大抵似る者なれを、初^{スウェーデン}分^{スウェーデン}つぎ
堀^{スウェーデン}か、但出^{スウェーデン}初^{スウェーデン}せ、途中^{スウェーデン}ま、黒人^{クロボク}をえつけ、あり
たれもカロシイアの彼と、弟^{スウェーデン}一^{スウェーデン}孫^{スウェーデン}の根^{スウェーデン}付^{スウェーデン}時^{スウェーデン}斗^{スウェーデン}を提^{スウェーデン}
て、形^{スウェーデン}し、其^{スウェーデン}面^{スウェーデン}色^{スウェーデン}悪^{スウェーデン}漂^{スウェーデン}を、凜^{スウェーデン}し、る^{スウェーデン}め、く^{スウェーデン}手^{スウェーデン}先^{スウェーデン}生^{スウェーデン}意^{スウェーデン}
あるも、目^{スウェーデン}は、ま^{スウェーデン}て、同^{スウェーデン}ひ^{スウェーデン}尋^{スウェーデン}て、の^{スウェーデン}く^{スウェーデン}と、知^{スウェーデン}り^{スウェーデン}し^{スウェーデン}な^{スウェーデン}り、は、黒^{スウェーデン}人^{スウェーデン}

の^{スウェーデン}り、ア^{スウェーデン}ラ^{スウェーデン}ツ^{スウェーデン}プ^{スウェーデン}と、い^{スウェーデン}ふ^{スウェーデン}し、ま^{スウェーデン}き^{スウェーデン}り、を、法^{スウェーデン}玉^{スウェーデン}通^{スウェーデン}河^{スウェーデン}と、ま
く、^{スウェーデン}何^{スウェーデン}る^{スウェーデン}よ^{スウェーデン}し、と、教^{スウェーデン}日^{スウェーデン}を、留^{スウェーデン}せ、ガ^{スウェーデン}ラ^{スウェーデン}フ^{スウェーデン}と、い^{スウェーデン}ふ^{スウェーデン}官^{スウェーデン}人^{スウェーデン}の
飛^{スウェーデン}館^{スウェーデン}の、を、あ^{スウェーデン}よ、イ^{スウェーデン}ノ^{スウェーデン}ス^{スウェーデン}タ^{スウェーデン}ノ^{スウェーデン}、コ^{スウェーデン}レ^{スウェーデン}ン^{スウェーデン}ゲ^{スウェーデン}と、い^{スウェーデン}ふ^{スウェーデン}大^{スウェーデン}役^{スウェーデン}お
あ^{スウェーデン}り、は、あ^{スウェーデン}ま^{スウェーデン}、右^{スウェーデン}の、通^{スウェーデン}河^{スウェーデン}役^{スウェーデン}の、者^{スウェーデン}た^{スウェーデン}も、形^{スウェーデン}る^{スウェーデン}よ^{スウェーデン}し、な^{スウェーデン}り
イ^{スウェーデン}ノ^{スウェーデン}ス^{スウェーデン}タ^{スウェーデン}ノ^{スウェーデン}者^{スウェーデン}外^{スウェーデン}も、コ^{スウェーデン}レ^{スウェーデン}ン^{スウェーデン}ゲ^{スウェーデン}の、役^{スウェーデン}お^{スウェーデン}も、い^{スウェーデン}ふ^{スウェーデン}り、と、ま^{スウェーデン}き^{スウェーデン}た^{スウェーデン}事^{スウェーデン}
外^{スウェーデン}人^{スウェーデン}の、衣^{スウェーデン}食^{スウェーデン}位^{スウェーデン}の、難^{スウェーデン}何^{スウェーデン}る^{スウェーデン}も、は、役^{スウェーデン}所^{スウェーデン}より、取^{スウェーデン}中^{スウェーデン}は、し
ま^{スウェーデン}け^{スウェーデン}り

按^{スウェーデン}ふ^{スウェーデン}黒^{スウェーデン}人^{スウェーデン}の、南^{スウェーデン}ア^{スウェーデン}メ^{スウェーデン}リ^{スウェーデン}カ^{スウェーデン}の、人^{スウェーデン}を、し^{スウェーデン}ん^{スウェーデン}り、ア^{スウェーデン}ラ^{スウェーデン}ツ^{スウェーデン}プ

といひし地名又は種族の名々詳ある事
とほむ

諸王より使節ポスラニカとよみ來りて諸王の子なり何の子細
よそ來るや去るや何れも旅宿をあたふしリユマン
ソフガラフといふ丞相の館よりイニバン 伊斯把尔亜の

王エをコロリといふよりは使節をとりてしる者逗留せし
見へりあるは外王の使者をとりてしるは旅を
人もなしたるは王の名なきも留めず

上官の人々を國を治る者多し子イメツの
辞をつひて先王の能く諸王の人々を通弁する
故をとりて但し玉王は前よりオロミアア辞を
使をとりてさそカラニツケハ和柔地なり子イメツ
カラニツケとれ何き少くの遠のきといふ

按ふ子イメツハ入尔瑪泥亜あり和柔地あり
ホーコトイツ即カラニツケ 和蘭の宗國なり
和柔地ハホーゴトイツより轉り來りてあり

たもあまし

漂客等子イメツキオロミア領分の地

舊都の北邊のふま^志と^志一^志東^志北^志 志若まの
その他の

あまを 志 按^志子イメツキ オロミアより

ゼルマニアを称して呼ぶ名なり 漂客等曰
昔今の地

子イメツキより婚嫁せりといふは同族 魯西亞國
あして又帝孫のふあれいなる

志譯説曰ムスクワ意城ノ郭外ニ入ル瑪尼

亞國人所居ノ府アリ造營美麗ニシテ

人居稠密ナリコレヲ名ケテ「スロクワダ・イン

セムスカ」又「ニーメツカ」ト稱ス云々 漂客等

は事をすむるに地を思ひしあまし^{ケタシ}

子イメツキを仰げニーメツカある事特にお

しゼルマニアの一名ニユーメツトと稱する事

此地説より見ゆ

スウエイツケ 雪際亜といふ土地の寫き不^レ皆オロ

ミアより攻め取りしと今の新都ペトルブルカ

スウエイツケの原地ありとするを、所、残されて自主
せるスウエイツケに今、オロシイアより、給米を送る遣
すといふ言もきけり

先年先友等を送り、東に時、献上物の口報禮
小新おのアラウチ大長刀をつらとされ、是を彼より日本
作の新兵器と稱す、一國寶の一とあり、是よし
イルコーツカよ、イロコをきけり

源忠朝曰オロシイアよ、何處地をカラニツケと呼ぶ

又新和系を新イブーラセと云、彼國版の地圖中、ある事
太十帝推し、東に世界地圖、此中、冊中を見らる

和蘭 ゴ ラ ド ラ シ ド
TOMAHAM.

新和蘭 ノ ウ ラ シ ヤ
HOB TOMAHAMIR.

是オロシイア文字
オロシイア漢あり

ハ魯西亜テ「カ」ト云、厄ガ勒リ祭シ亞ア國ニテ「カムマ」

ト云フ、和系ニテ厄ガ勒リ祭シ亞アノ字ヲ註セル書ニ

即和蘭ノ ク ダ ゲ ナ リ ト 見 ヘ タ リ 因 テ 思 フ 和 蘭 ノ

とをカラニツケと稱すといふもの、「カ」「ゴ」一語、其、轉

おんん

留帆の節大洋中を大なる世界の途中へ来りて
て程のをある水夫も海を飲せし又是れ
船を極百里行て大なる海中へ至りては
程のりて再回子及ては不をエ多ト止といひ
の外暑き不なるを

按ふエ多ト止ハ羅^ラ旬^テ名和蘭^ニのミツテル^ニ井^ニ
と云ハ中線^ノ 帛赤道なり世界圖を閲するふ

初回を亞弗利加海にありて赤道直下の海
上を又一再回を亞墨利加海上ありて赤道直
下をありて生ず一大奇事といふハ一歐羅巴
洲の人世界を航海するに常とす系とい
とハ一回ハ赤道下を通船して一兩回ハ及
つるに常とありてありては魯西亞人も
は夜の船程初めの通りをありては夜の船
人等新都の川口を敷リカナスダへ出大船

小島ヲ組ニオ、ストゼイ」と呼ぶ海より開帆し
てアンゲリ諸厄に船をよせ、又より南へむかひ
加那里亜島聖弗利に立より、大船を出テ、船く
して赤道直下を徑、南亞墨利加に向ひ、ブ
ラシリイエカテリナに船を寄せ、数月滞留せし
より、同海の出先キヒニールランドといふ所の岬を岬
とす、け海を右ふして、後海へ再び赤道下
より出、是より遙の洋中マルケイス島に船を

泊め、水を加ふカナスダより、是を彼里、數十六千
里按、此里法四千三百七十あり、といふ、又北亞墨利
加を右ふると、又より東北へ系出し、
亞細亞洲の東北隅カミヤーツカノ濤へ至りし
又南より向ひ、日本東南方の沖へあつる海上
をさき通つて、我西國九州の色隅長崎に
至りし、天下四大湖方の遠洋を畫く、經
歴せりといふ、了、和漢古今未曾有の

奇事、此れ比すきりの、何れも、あはれ、彼人、
等も、此等の大経歴、前代、初てあり、と、ゆゆ、
と、航海を、常とす、其の俗尚、已に、船航、日本
の西北海を、只、船夫、諸島を、たふ、見、再、以、カ
ミ、ヤーツカ、に、新、我、玉の環海一周、又、再、以、
日本東南の沖を通り、支那の南海を、後、
に、廣東の港、舟とよせ、ラニダ印度、ミルニア百尔西亞、ハルビヤ亞
細亞海を、通、了、亞非利加、海の南、邊、を、

さき、く、之、度、赤道直下を、過、き、以、き、を、し、め、の
海、路、を、取、り、て、西北、に、向、い、本、玉、へ、歸、る、よ、り、
大量、を、取、り、皆、て、奇、事、と、す、る、も、も、只、る、ま、り、
き、然、但、我、東、方、諸、島、の、人、も、あ、り、て、開、闢、之、千
年、上、下、縱、横、を、き、トク一、大、奇、事、を、り、トク此、唐、の
天、竺、と、い、へ、も、周、り、の、ま、り、トクあ、り、て、トク取、り、トク取、り、トク
鳴、呼、奇、事、トク武、吉、の、船、路、前、代、未、だ、の、り、トクあり、
従、来、我、日、本、舟、子、トク颯、トク海、を、トクて、支、那、地、方、諸、

高小いりなきは南方安南天空方角の
諸地へ漂着せしもの。是を幾回あるを記し
其中天明の以伊勢ふ光古史等、北海の僻
島へ漂着し、史より魯西亜の内地に入り、
本玉歐邏巴洲の都府を到り、数年を経て
歸朝せし。未嘗其の奇事を記し、ふたたび再い
原語をありて、オホーワカ湊より松前へ帰
居せし。なりけり。仙臺の源ある。亞細亞洲

より歐邏巴洲の都下あり、此湊より南航
して亞弗利加洲、亞墨利加洲等の四大洲
を一周して、警海数万里の海路を涉りて
歸朝せし。漢土日本、固より東方亞細亞
洲方の天下古今上下未嘗其の一大奇事
の言初ありし。

け交の船を献上の當りて、火の焚する仕無の
機業あり、策の様あり、つる類の方あり、を以て、

りのまう是を口せ、糸^{イト}は付て火光^{カク}を射すよふ人形
あり小筒の鉄炮^{テツポウ}を持せ、高の炭火、生鉄炮^{ナマテツポウ}（福）
て玉を炭の管をあせり又平盤の上紙細工の
人形を伏せ並に仕舞のふと口せ、此人形起ちて
踊る名、何といひていふか仕舞の物や奇妙の器
なりと云ひあり

按ふ和名持返りの機器エリキミルテイトし
てこれ俗間エリキテルと呼ぶ物ありし人形

小鉄炮と云ふ器ハ新造と云ふあり
公邊呈書の中ふ載する献上物何れも実常珍
器のふとなり一當年に朱製造の取つり漸出船
前ふ出来ありし器よし中々大鏡四枚、至り長大
の物なり長口間許横を丈五人程厚四寸五分斗
裏板張縁、金縁、唐字板の物彫りてをば飾
硝子鏡大小四寸餘あり、ハラくといふ白石の板
又盤の如くきりある物も献上物の器にも用る

振子なり又は石にて歴代の諸王の像を彫削せる物もあり

按ふムラウキと和名ありヨマルメル、ステ^石ーニシ
して我紀後白島^ラの白石の類と申す白瑪
瑙の属なり

織物の帯物も紋筒ありセイウチの牙ハ三尺より四
尺位のもの十五六寸ものものは外種々の物数多あり
船中、大抵献上の者の物の多く積み来りしは船

皆船中乗用の具を多くし交易の者のものとして
一切を^して^しるなり

宮初源為の島を始としてオロニイア内地へ今
帰帆をば百諸玉の人を見交し出合りしと容
貌言語も各異ある者も数多を攀らぬたの如し
アリオウトウ

オホーツカ
カミシヤード

初め源為せし「カンデレイツケ」は島夷
族名也。光名「アレオーツカ」といふ
和領の地とて初め是船せし港也
カムシヤード人といふ事

ヤコーテ

ヤコーツカ近傍の諸地を經路の
人々を指ししりふ

プラーツケ

イルコーツカ近在土着人類其名

トングス

バイカル湖邊の人類

タルタ

鞆面鞆

ケタイツケ

唐山

チワシヤ

イルコーツカより新都をこの地を
なすりしりふの地名

カメイカ

ムスクワ北邊の人

アラツプ

黒人 クロボウ アメリカ人ありし

カルラ

小人 丈三尺四五寸あり

按ふサモイデといふ地方矮小のより今カロコニア領とす
カルラといふ小人をいふものか後ては都ては市とす
ノットの宅に何れも移き居りし時唯今もあつし友人の内
は小人を好むものありて始ては又は遠くは人々カナ
スタの形もつと見し所再三とてと世界に小人あり
といふ昔より和漢口研ふあるものありしと云々
志すす和漢あるサモイデの地人小人をいふ
不思議なりて我日本の人目にあつて始て
邂逅せしりふ又一奇事なり

スウェーツケ

雪陰亞

アシゲツコイ

漠義利亞

ハラニソースケ

ダンツケ

イシパン

ポルトガリ

カナリツケ

エカテリナ

マルケイス

サンベイツケ

拂郎察 フランツ

弟那瑪尔加 デナマルカ

伊斯把你亚 イスパニヤ

波尔杜尾兒 ポルトガル

加那里亚 カナリア イスペインの人住居して
領地を有すといふ

南亞墨利加 南アメリカ 伯西兒 ブラジール の島

アメリカの孤島

同 右ニ島北アメリカニ属すを以てし

右二十二類北亞墨利加洲

北亞墨利加洲のオニデレイツケ諸島北アメリカ洲に属すといふ

亞細亞洲 歐羅巴洲 亞弗利加洲 南亞墨利加洲

五方の人を以て是を以て比類すも亦た其を以て

魯西亞の人類に何れも又高き髪落すも眼彩も亦

色を以て其他の人のやうな髪も亦た有る

止白里 加山より東北カミシヤツカを以て の人類に又短く

髪黒く眼も黒し

傘を以て骨を以て絹帛を以て衣を以て上人斗用ゆる常人

雨の時の「ニヤツ」ハ 帽笠と 産紗の合羽と用ゆ羅紗
を縫くるともあつてのこゝろ 産紗の川を流す水氣を
よ〜〜あつておあつて干し〜産紗を

櫓ホバシラを舟を櫓を押し舟日本を舟と舟舟日

本漂流人を都よりイルコツカ 止つて舟より又

舟の舟より〜役人某何とオレキサンダラといひ〜と舟皮
官ハポローチクときひや

袋を襦カをかきし袋の上の「雙龍」

の國跡と舟よりもの也 驛路の鏝れをといふもの

又黒巾をかといふべき物も道中駈つて人たれをえ

て甚畏れ〜何事も聊々途次を舟より〜たれを

メツタリ別ハス〜又〜舟をたれ〜ものや

粘ネリの用とあすりの「膠ニカ」の如きもの魚より〜

いふ何と〜いふ魚の頭中ハ粘ネリを舟に〜

煮いせて用申紙を舟の物を接くは皆是をつふ

よく粘ネリする〜書笈に封〜赤色を舟に〜

の如く舟より物を編帽の大きを舟に溶かし〜

凜々つまはるる糸を押す

按ふられ和衣ふブリ書筒ラツカ編といふの

見ゆ虫白蟻と松脂と合し若丹を色と

つまはるる糸

^{ツクリカ}草ふハ羊ハ綿羊 ヤマニ 野牛 ^ヤゴジョウ のこ品

あて作らコジョウ別てよ後し鹿皮牛皮は京
考すぐよきなるし皮ふハ鹿ハかハ日かをハ
シヤ皮と呼ぶのハヤマニと云申はる源人等持

後し皮藩園皮枕ハヤマニの皮と都府を銀
甘お校ふ求めぬ

去辰年彼曆較一子七百八十五年といふ此年
女帝エカテリ十山崩をこれとゴソタリ ペレスタウリ
といひ是天下根出さきあふれといふとゴ
ソタリ 考出アガの社さるふといふ辨ペレスタウリと女帝
王は死去ふ限りいふ辨あて常人といふす

按ふ崩御といふ事なき

凡そ新婿甥婦ムコウメ、床入トコをとり、其姉妹の内、内房は外ふ
 何れ院ふトして、其新婦已に纏帯を出して外ふある
 かの小後すは、若是を改め、是をシテ其志シテすすキ
 物あはれをシテ其何事は百里オへ送る里方オを
 大いおぼし甥も禮ふ行くカ親睦ハ近小婿ハ其
 是上カ頭をつけて禮をかし又立テ其親の口ハ已
 けを合す是常式をありト又志シテもなきは
 礼ふハ固より行くカ婿ハ甚不快新婦ハのあ

親ハ婿の外ハ其母ハ其ハいふハ其新義活あり

問新婿の婦年長知の論かくハ其ハの

イブカ
 子不審ハいひハ其

若彼人あて日本おより牛カ立の愛はるカ
 多ハ其ハ初縁の老いハつカあハあハ事ハやハ
 いふハ其ハあハ信ハいハいハ梅ハ其ハ古礼の懸
シタキ
 胎ハ其ハ襦衣ハ其ハ類ハいハ其ハ年長けハてハ
 初縁を祝す其ハ意ハあハ

オロシイア本國焼なるといふ瀬戸物類外面金と
きりきりて見ゆる物数種リニニゾフガラフれ家
んちりきり

豚と馬とは畢丸キニタマと取るるは豚丸と云ふをんちり
先ツ生皮をほきおちり玉とあつたし手といてロイ
とちちき出しを痛く推しおち放しやる丸と
去りし何と云ふかくのめくまぬ肉よくつ脂アキラもよる
かゝるといふ

按ふ食料ふすまもの太肥大なりしむる為なりし
阿多楽味もその食料のよめふ高ふ牛より畢丸
と云ふはキニキリ牛を「カス」名け常牛を
クーベーストといふ雞ニバリよりもとるをめとそ共ふ脂
のよめかゝり肥大なり志ある為なりと云けり
和食より豚よりもとるあるはつす本領の油を
諸地を歩きあるといふ犬をありしはめとなめは
犬も亦畢丸と云ふといふ

馬の使るゝおや此輩のあはれ畢丸を去るぬ耳鼻も
さくもめけすおがんつゝを及して字師とすとを
伴父馬のすまけりふ及をすお銀を使ひては
腰の懐巾をかゝて持まはれ名を打ッ畢丸の人も
持戒の修又音曲家おのり者といふ先年光吉又
お徳とあり

按お畢丸を抜き去れ男女の情念を絶つたふ
肉勝肥腹をあすといふ生理詳あつて愛お浅ぬ

釵をよくきふたる物といふ娘も撓めても又もとの
如く伸ひて生並ふあるも又前におくして先の方鈍利
あつおし実き透りをはれ用とあすものあや

本正月と年れ改めお時已れく年を本終し
時といせは報誕辰^{ウツシヒ}のあつし生あつる日よりいつ
増しては年齢を稱するもかは時年と年を日として
各生れ日と稱せぬおあつては世輩の人二月四日
此生れあはれ二月四日をよそ世輩のあつる五日か

廿年と一日といひ三月六日ふるが廿年とを三月
二日といふはまの死をうけて享年と研ふ彫り
ふも四拾を廿年三月廿日と記す事なき也

按ふに其の歐邏巴洲の風俗とる申洋中

一 あり死者は其の傍の悟真寺に葬埋せし

甲必丹カビタンジュールコープの研面とるふ事

年何月幾日と記せり拙生辰と祝

いふ和漢文をよみしむるを其の旨と

以て齡と年を時と定めて其れ十二月

生れては翌正月に廿年といふなり

多しといふなりといふも何島々あるは但し

或るはと考へず

板硝子イタビイドロと切らふ水晶の如く玉石を研と作

くあらまざるなり ぬき

案の我 邦をいふギヤマンの正名は「ジアマント」なり

大光曰オロミアをてギヤマンをドリアマントとよし

ツシガといふ病彼地方に多し土地^{キビニキサカサ} 寒冷ゆふある

病と云ふ常の慢字と吃する者には病を防ぐといひ

傳ふは症一筋甚重き氣ふ申るより起る病と云

烟草寒濕氣と雖も^{の性切あるある} 此病先ツ初發は銀肉黒色とあり

軀體手足筋脈と云ふる先固硬くなりて色黒と

常は此病ふたり病作する者能くす甚苦種す此

牽急とあるふ多く^{ヒキツリ} 膝臑なり

漂客津太夫も漂良も沖合までは病と云ふす

みよたりて一身の轉動する能く漸く人の肩

すうりて二役と云ふ^後 後常は志すれども

於今且病牽急し歩行不自在久咳はるおぬ

同社の内此病は罹りし者外も三人をありきカ

ホーツカも云ふて^ハ 嚴寒の時毎に病苦のもの

多しヤコーテ・ブライツケ等は病と患ふ者といふ

常は烟草と嗜む者より預防する者といふ

土人も甚く病患するといふ^ハ 人齒銀腫

痛する者もツシガカクおやお好いひて人々あり
いざいざい

按ふは病和をふいふニケウルボイクといふ病
き其書所載六のツシガは病と符合す是

醫宗金鑑の書お出すおの青腿牙疳あり

イルコーツカハ遊樂^{ユサンジヨ}所とある酒樓ありこれとタラビセ

ライと名あつ

大光曰料理茶屋とカラニヤウといふ或は是と

いづふいあははといひ

手代書院等もつりて餘程大衆あり酒の類も種々

上好と稱するものハアメリカ・ハラニソースケ等ハ

本物もて教ふありおて葡萄酒の銀酒を

生中ハ玉実^キの戯具を設けざるは玉実玉の

戯とベレヤロといふ 按和茶ハビルヤールといふ
器の類ハ詳なり 相令

は接ふおつて酒宴と傳へて戯も遊^{サカナ}ふ下物

の類他よりいふたより興ふ系一銀玉玉実の

商^{アキヒト}セリコフの娘を縁候ありて七千里の途平
イルコーツカト下りて婚姻を誓ひし中其妻は度
出帆の前年^{成の年}都て病死せりし也
亥年彼國年曆一千八百三年なり外五^ハ使者
長^ハし^ハは年始のたると承り

按^ハ小當之とありて宗初といふ事於又佐立
新^ハ之海上大出りし日本を以使者出せし
子の初めたりといふ事や前代唐山北京

等^ハ使者往來なる^ハありしと云ふ事

日本人^ハの^ハ望^ハ一^ハ唐人^ハの^ハ意^{カザリ}飾^ハ多^ク實^ハ少^ク一^ハ石^ハの^ハ
氷沙糖と交易物^ハ海^ハす^ハ小^ハ生^ハ肉^ハ小^ハ木^{キレ}片^ハを^ハ
雜^ハつ^ハき^ハし^ハつ^ハか^ハま^ハき^ハは^ハ航^ハた^ハり^ハを^ハ導^ハき^ハし^ハめ^ハり^ハき^ハ
本^ハに^ハ今^ハ時^ハに^ハ到^ハり^ハて^ハハ^ハ世界^ハ中^ハ通^ハり^ハ通^ハり^ハせ^ハり^ハる^ハ
國^ハ々^ハ但^ハを^ハ必^ハず^ハあり^ハあり^ハ日本^ハを^ハめ^ハり^ハ是^ハを^ハ表^ハ
立^ハ通^ハり^ハあり^ハし^ハ人^ハ々^ハ毎^ハ度^ハ呼^ハび^ハし^ハを^ハき^ハし^ハめ^ハり^ハて^ハ

ガラニツケ 阿蘇地 近年五中^ハ利^ハを^ハ國^ハ王^ハ七^ハ載^ハされ

て今時、玉をたゞし魯西軍兵と遣ししを
平均し玉を番兵と遣しきけり。ハランソース
と同様ありしり。形中をも法後人かくと物語り
按し近年戦争お終り風説書年々見
るし王を執せしり。いりや又王を
エニゲランドに逃けのひ孫好もいり丑寅
年以後の風説之上書し當年中必し漸
平穏ありしと記しり。た共ふ言者と志す

か玉より献上物何事陳べし。先年かあを
送進しりしれをあ交さしおせし。侍者あり
今いふ其り問尋すれ。一向に沙汰すべしとの
嘆をきくも侍り大い腹立ちり。定て侍者お
さす。持しりし甚不慮ある致方とヤセし中
按しおけるも。あ交りしを記しり。毎すべし
ペトルブルカ逗留中旅端リユミンツフカラフの近
あて七百人多し軍船の新造あり。津た又學給す

乙ありしよ 長サ何 遺忘 百高廿 底より八九百も

了し月の方 松林厚板ありてなきに其表を又松板

ありてより此上ちやんと塗りあり 相水入る通り

網ありて好く是れ松の透るぬ 存といふ板板を松

の本を用ゆ之に継ぎを板にさかちり 継ぎ目

継ぎ目なる 太サ 厚大ありし 長サ 五中松 ありぬ

ちよありし申 舟材 皆松ありしとて 船中 石火矢板挺を設け並船

上下する 傳言 船より 網階子ツナハレゴを用ゆる

兵糧を二三年分 舟中へ 貯ふ 皆 蒸餾の

人前 一日ふ 百五拾五宛アテの

百五拾五の 蒸餾を 人前への はりし

ありしものより け交の 使食 船中 貯ふ 蒸

餾は け 割りて 配分せり

船中を 右新造 船の 圖寫 一紙 ありし 様 寫す

新造軍船圖



金銀借貸の論文を徳の官紙あり 國幣兌換
の事あり是を要求して論文を徳むるあり
て第一約定を遂げ返濟せざる時、公訴の上裁判
を要するといふ

抱て存る人の一年限の定めし人揃ふまで終金
の多少あり大抵乙少せし審判 日本の上級位不
あたる手代 日廿五位より三拾七位計位不
下男 日七位計位不 下女 日五位位不

たる人之借人は入揃もありて論文もす多額あり
人丈一日計雇代 日本の上級位不 中人 日拾
五位位不 下人 日七位位不 以下四五
五位位不 程は手代もあり
豪高キセロフの水車場も至て多し 多くは
粉を挽くす多あり 中近東は地味初め
出来より水車の激勢あり大村本を板板
つせ多あり 廠の内、大録之丁約りて並に

前の五つ大材木の小口をのこせとて水勢を
漸くひきとれども、此の挽きこむに材木は
進み入つたふひきとれども、又此のあつた材
木と挽け進み出きのための挽終ぬ、此の存をつぐ
たりのあつたを、此の仕無ありたしく、埋め進みし
地底より機轉を返けし、此の申すのり、人吏傍
におありて、挽割るる板を、とて片舟、又此のあとを、後
けおといつたを、ありぬ、此の仕無、故人力と費さす

して、板の板モバ板ラクのり、出来る也

此の仕無の工、水勢の程合を、とて、試みる、事、甚、手
百、とて、再三、試みて、仕無せし、り、板、今、交、是、ふ、う、う、大、造
の費用を、とり、け、遂、に、成、就、し、永、世、の、大、利、を、致、せ、り、と、い、ふ

按、ふ、ペ、トル、ブル、グ、都、府、圖、中、第、之、十、六、符、フテラフ符、和、系、人

サ、ア、ガ、モ、ー、レ、ニ、ス、と、記、せ、り、サ、ー、ガ、ハ、鋸、也、モ、ー、レ、ニ、ス、ハ、石

碾シタち、り、水、勢、を、て、石、碾、旋、轉、し、て、材、木、を、鋸、曳、す、也

イル、フ、ー、ツ、カ、み、て、キ、セ、ロ、フ、が、創、製、せ、り、の、し、の、
巧、人、某、を、れ、を、見、交、け、て、搬、せ、る、の、の、り、や



は工丈の罪を蒙りて都さるよりはさきさふ来り
ありし咎人某ある者の巧めさるよし其妙巧自有
と驚きうしたるをみて其製巧見も妙もいふさうし
とあり都さるふ別々何さるや

此一事其もキセロフガ器量遠大推し
へー莫大の費と出し彼を以て再三精巧
を成就せしめ後東不費無窮の大利をか
しむるや

按ふは巧小似るの器大西奇器圖説と云
書小圖状其物あり世小機智の人ありて
彼を以て考へ考へ是と知えんとするもの
才を生かせはふも又この良便の奇器
出つしきもや 茂賢 深なる器小對向の際
は紀開小諸圖と添へて思ひよりしは後
ときけさる者起さる所小室第一小時を
おの大界深大のたしく圖小作しめて

なる事となくぬ但し其詳ありと云ふ
と述懐するのこ

止白里^{シビリ}地方廣漠れ地となり閑きく多し流
刑ふ處せし人々を使ひしと云ふ此器を巧
出せし流人もその中あるしイルコツカ
留せし日都は方より咎人の流刑ありと云ふ
人程カホーツカの方より川邊に引けるを人あり彼
アウタシの意より「カホーツカ カミシヤーツカ」まの

險難の山路をきまり閑々志あるつりあるや

按け多人教字ふ罪を犯せる咎人のこふを
まし何と云ふ國と軍戦して擄と云ふ
兵卒をよめてやあし

井戸の制我國に於るをみし皆を統つるを
煎茶ふ川水をつく
婦人腰緒をつくるものあり紙につけ
あな

イルコツカの内一ヶ寺涅槃像の画とつけ金とあり
きり今くけ方ある物と目し

船中並ぶ長崎洋留の中見聞雜事

使節系船表通り 十四巻の圖より如し

長三十二百餘 幅拾貳百餘

高拾間餘 大柱三拾貳百餘

大丸らん多 徑三間 又りし拾三百

帆數十八斤 石大矢三拾六挺

船の右舷の帆石大矢拾三挺 艦の檣の上
六挺又、左舷の石大矢三挺 自中不廻轉

すなはち仕無き物あり小あはれ筒長き如遠
きふをさるといふ右石大矢共海より海賊も
ん元かく思ふあはれ筒先を括へ玉も中編へ
ぬき玉の重き式費目前後なきし

礎コトク斗段かして大いなるを五段重サブー止と
いふ法馬コトクあて立るかるといふ容易小礎を下す
いふもかし

彼節飛ぶ平生二階目の産後斗括登安程

のふなり時より二階のへも何なり飛なり艦の
うらあやたたと上へは皆硝子障子と日本へ
献とお括艦の方へ指さす船方フナカマ皆表の方へ
飛り後人の皆顔屋へあり

水主並ふ我くトヤの案のやけ作らるおの内ふ
夜中ダイトモの師トモよりぬりしすなはち志さるお也
厨ダイトモの早トモを唐銅を圍ケムダシの上ケムダシ烟窓あり灶ケムダシの
申ふをを扉ありしより出入ケムダシすれも煮

炊ヒキの百ヒ圓マく鍋シメく少シくも好ヨクく火ヒの散チらぬ
根ネの志シく方カタめのも也

食シ事ジ刻キ限ゲン陸リクと日ニチ九ク時ジと晚エンと与ヨ夜ヤと

食シ料リョウの蒸シヨウ餅ヒョウ 豆マメ味アジ豆マメ 塩シホ 控コウ割カク蕎ソウ麦マク

畜シヨク産サン物モノ 豚イナリ二ニ三サン斗ト 牛ウシ糞フン八ハチ斗ト

雞トリ斗ト百ヒャク斗ト
此コノ亦モも定サて多タくマシし
尋ヒ問ト違チガひハ作シてス也ナリ

船フネ底ソコの金カネ鍍バツと石イシを並ナりシ上ウヘ之ノ飲イン水スイの樽ツケ
と並ナりシ較カク百ヒャク也ナリ樽ツケの長ナガサハ七シチ尺シヤク程ハジメ有アル船フネ中ナカ

あそアソひヒ玉タマて大オホ事コトの使シひヒ一ヒト日ニチを人ヒトに五イヒ合カウ平ヘイ均クン水スイと

取トルらルあアのノ是コト具グあアそアとト少シくも繩ヒモを並ナりシぬヌ也ナリ

志シく方カタめメの丈サテ水スイを搦シ米コメ汁ジツ水スイの如ゴトシき物モノ

あそアソひヒ顔カネを洗シひヒ也ナリ古コ水スイ樽ツケの上ウヘに食シ物モノ乾カ

樽ツケ造ツクりシて並ナ

端ヘ船フネの五イヒ艘サネ入イ並ナ

帆フナの麻アサあそアソひヒ織オリかカるルもの也ナリ上ウヘの方カタへ掛カるル帆フナの何ナニ程ハジメ
も軽カきキとよヨくク地チ細ホソあアるル用ヨウ申マシ

船^{カデ}ハ外よりハ是れ船子附けとく

本船の名を ナデシダトシヨル静謐太平

をゆしと表ししるるの船おまひ

宗祖の人と経人ハ廿人をより水主ハ四格人

已上ありて是れハ

エナラウ マヨル ニコライ バイトルイチ レサノト

是ハ此友の使節也 魯西亜人

マヨル官 三人

是使節係役の如き職に不絶に侍り附居

け内事と輕の政とも務む

一 ヤルマノ カルライ 子イメツの人

二 ミイトル イワノイチ 魯西亜人

ハ人ハカミシヤツカより宗に付地代友の如し

三 イワニ イワニモノイチ 同

ナレハ是輕院カペタン也カミシヤツカより入船

カペタン 船頭 ポーポーチクスの官也

一 イワン ヒョータロイチ 曰

此人幼少より船を志す智以師とす

七ヶ年航^{フナタ}てせしむる廣東のころまでなり

後海せしむる中際迄アンゲリ人をめ

至て名譽の人を先年世界を志し

十三ヶ年同子歸せしむる船も之夜

造りしと也姓名を忘れぬりヒョータロイチ

者は交カナリツケト始て来れり也

一 マカル イワノイチ 魯西亜人

小船頭 三人

これ羅針を以て且海上の里数を測ふ

是の糸を流し川あけて常用し是を知る

松子なり

一 イワン ヘレプイチ 曰

一 ウシライ ツシライイチ 曰

一 名ふ是

下案針役

三人

羅針ホーリと見る役

一

ヤルマノ

ヤルマノイチ

子イメツ人

二

ペートロ

トロムイチ

魯西亜人

携つたし世界圖と長崎滞留中ニ
て曰各通船の及船と是よりヤと我
共登し、教千万里のより又不足といひ
るは上陸ゆめは人々尋るるまで
當感すくくも海路を朱江と無

畫相

は万国の彼都を報に教を求めり

一

名遠ワスレタリ忘

醫者

三人

ドクトル

外人

是の位友ある醫師なりは使其の醫術を

ランゾフ イワン ゲレゴロイチ

外人のダニツケ

よりの系組

は人諸國の之徳を通すは其の長崎を
さす通舟す畫も細くも出見る人なり

老人 名子亮

レイカレ 老人 外科 之 位 昇 醫 師 也

老人 名子亮

コツブ 斗人 兄弟也

兄 松幸兵衛 醫業 尼 哲

弟 松宗 方針 等 の 子 尼 哲

商人 松幸兵衛 と コツブ くと 呼 ぶ

畫師 斗人

老人 名子亮 丹ツケ より 入 船

老人 名子亮 魯西亜 人

商人 船 中 より 病 氣 染 せ て カミシヤーツカ より

上 陸 腹 脹 痛 也 石 の 出 來 ぬ 病 と 言 へり

草木 鳥 獸 等 と 味 味 する 役 老人 生 子 子 承

此人 右 画 師 病 者 の 療 治 方 法 の 爲 附 添

カミシヤーツカ より 上 陸

右 の 代 り 老人 名子亮

カミシヤーツカ より 入 船

銃炮テツカウ

指南人

を人

名も是

此人水之たの内へ銃炮の持方お方おと致し
且輕代りをして初めさふ方積りをして使ひ其しう
情弱くて我儀多く船中使席の令ふ背く
子ありし故カミシヤーツカより留めなく依て
カミシヤーツカより且輕と入る

且輕

六人

カミシヤーツカより入船

マタロス

水主也

輕十人名一も是也 四十人

餘系組皆々諸玉の産なり、其中鞆鞆人
あり力を登衆も務好し水之民六人表ふ三
人触ふ三人指す此水之内に舟偏とす
者も勿論又皆體仕立物を取大工組治事
の子とも重給指す也

按ふ右人の姓名うかす所遠おる
是も亦あきし於此所記せ書き上げし

姓名年齢の調べ書と。はより大れき
 付写のあやまりあつた似あり大れを以て
 深きふ示しむすふしと皆彼等が
 苗字なる魚といふをさうふ是し
 子も少くは中彼は此某をさし
 しが前記と照して参考をもなき
 然らば附記す名のしお細かすお
 再び深きふさ書せし也

ニコライ・レサノツト ボスラミカ 使節 歳四十一

和系通詞和鮮の使節の事、和系語をアムバツサチール
 とし官職和系をカールヘーメルとしよし

クルーセンステル カベタシ 船頭 イワン・ヒョー各イチ 日三十四

フリーデーデー マヨルと云官 日二十四

コスセラフ ロイトナント 日三十三

テイレシウス あれ外科イワン・モジヘイイチ
長崎そ風袋つうてあげし 日二十五

ワシベルケ 下案針役 日二十七

レーヒスタルレン 日 日二十七

カメンチコウ

業針役

日四十二

ランストルス

ダンツケより入船の醫師ランツラ
イワンゲレゴロイチありし

日二十九

ラートマノフ

上案針役

日三十日

オスセー

オフラード 官名

日三十三

ヘトロフ

陸船頭 イワンヘレグイチ
ありし

日二十日

エスヘンヘル

外科

日十二

コツヒホシ

おれ兄方の
コツブなり

兄
日十六
日十五

アロワチエフ

下案針役

日二十七

ヒルリシキ オウセン 日

日二十七

ホル子ル

アストロイシイ

日二十

セメリン

コミサル 官名

日十九

通計十九名

右傳抄のまゝを録し、てなつふ附せり按おこれ
皆諸役ありの事と申すは餘り輕く人水之
數人の姓名年數記するものありし

水之、至て是迄あり偏くもの也カベツシ 船路ハ海上

の事甚し功者あらずして破る今曉何の刻今
晚何時か何處の方角か云々見ゆし山ありたる
處をなるといひて水をと帆柱の上へのぼせを
見せしむるかに別限通る果して山を見ずる
なり水之等いせざるの外も不圖を山あり
と見ゆ速ふカペタント後進あす也

諸役舟夫くの職を勤めて片時も怠らず昼
廿四時の内一時毎に一時は我系つらとつきて

海原へ流しゆありあけ美用して里程を測り砂
時計を以て一時の万の船幾里走りしといふを
試む又重りをつけある糸を水底に沈めて海の
浅深を量り試む且里程を測る風の強弱を
て凌ひあつた日輪とも測る根子なる夜を
目鏡みて星とんて考ふ毎刻これをして中級より
美用舟夫とあつて九時前ふカペタント指す也

按し船長とカペタントと漂るたといふ大光

カビタコといふ凡そ物の珍とならる友に
みて長き頸ともいふものより元々羅甸流
のよし本編中カビタコと記すものあり
少のまゝなり

後人の録る根付時計とを眼鏡と不持と
使第の船日本海海の事記す一先弱と記し
根付申付交通船すを何處の至ても知り
積るる根付なり

按ふアメリカをこの事や先弱かとして
一箇年前よりの企を以て商船往來を
此等記す一流布せしある一カミシヤ
ツカを本領の事取圓より知る

島山のある近きあり何方ありと沙界ありて
川の流るの如くありと記すなり

何處の海中ありしり鯉魚幾千並たあり集りて
船を覆すりと記す船の玉なり舟人銘を以て

実當めて所、獲りし

日本の事書物、は三つある物、仗節持年し
毎交、石多、極子、なまり、外、ふも、書、藉、類、教、く、業、入
ふ、し、て、携、え、来、れ、り、河、の、事、徳、し、本、を、や、を、携
交、字、ま、て、と、ち、り、た、も、け、方、の、め、ま、お、お、わ、れ、外、役
付、の、書、も、書、物、持、年、せ、り

新中条合の内、先年、魯西、西、より、ア、ン、ゲ、リ、に、援
兵、お、加、え、り、行、き、し、と、い、ふ、人、あり、新、軍、の、第、一、

先、の、船、の、帆、柱、と、見、者、お、石、大、矢、と、以、て、お、た、か、か、
や、し、ふ、す、る、事、行、あ、た、め、り、と、い、ふ、人、中、し、ふ、り

日本、一、献、上、の、色、お、ハ、二、三、年、前、より、ん、う、け、出、帆、の
年、を、い、ふ、出、外、上、り、か、る、を

一、大、鏡、四、枚、お、い、あ、り、や、し、外、お、硝、子、鏡

大、小、四、枚、餘、大、く、い、ハ、魯、西、西、の、都、あり

製造、の、よ、し

一、金、象、の、造、り、物、象、の、模、後、お、付、計、を、仕

以公財を打て、其鼻竇く仕物あり

一象牙の細工物、これ花を刻み線抜し

絞せり細工にて子のこらえり物に手板あり

て出来上りし中硝子の室サヤとかき並り

一腰刀あり並り鉄炮あり並り

一ムラくり云石板の如く作り磨きしを献

上物の意とあり銀あり並り書教多載せ

其あり

一創業の帝王以来歴代諸王の像を多く

石を彫刻せりものも持其あり

一織物乾敷十巻持後あり

一セイウチの牙板中献上心無し持後あり

一釵並り鉄炮類種あり

其見者しかなり

何京路通有石橋脚在是つゝ也崎より通舟能

りうろと使常時志あり

長崎にて彼人等日本^{漆若}産物類を以て甚く賞
りて其の唐より來る物も亦おほい大に^{ガト}賞りて
しや又紙も唐より得てて其のよきもの
の也と稱せり

今和源氏のオンドレイツケより日本迄の里數は
四百八カホーツカを以てしる道程近しと云哉
里といふものききし右カペタンの話あり

オホーツカより銀賣地 子モロを十九里と云哉

先年光老史を以て東に通事トコロフにあり
魯西亜の都より日本迄五拾千里

彼國里法なり

カミシヤーツカより日本迄四百七百里 彼里法

右カペタンの話なり

長崎書上あり

一あるや其の日本迄の系筋里數を述

オロニアを以て
デー子マルカに

五百里

デー子マルカヨ	六百里
エングランドに	
エングランドヨ	二千
カナリア島に	
カナリアヨ	三千
ブラシリに	
ブラシリヨ	四千里
マルケイサに	
マルケイサヨ	二千
カムシカツトカに	
カムシカツトカヨ	千里
長崎ヨ	

ノ凡壹萬四千百里

漂客将来の地圖に海路を線とアシケリヨ

我日本長崎を以て海路里数間氏考

定する物ありぬ

エングランドヨ	七百里	カナリヤヨ	一千八百里
カナリヤを		ブラシリを	
ブラシリヨ	三千七百里	マルケイサヨ	二千八百里
マルケイサを		カミシヤーツカを	
カミシヤーツカヨ	九百里	日本長崎を	通計九千九百里

此里数皆我里程を以て三十六丁と以て

これを以て地球一周壹萬零壹百里

許と以て算するあり

右里教と記すの傳説ふよき原圖の海
路の度格ふ應し其路線の迂廻ふ以て
圓規を以て測るは多也是大約の里教に
或は傳説より精詳あるもの一考あり
ペトルブルクよりアシゲリふる海路の原圖に
記さずあるもの載せず

長崎より書上と間氏考定するもの大いふは
且書上ありてエングランドより日本を一萬二千
里とある間氏考定するもの九千九百里ある書
上の方三千百里里教多し

補光古史雜話 丙寅丁卯兩回閉せる也

ペトルペルライ 創業ノ 帝王 二月上旬の誕生の傳説あり
テムホノ オシツポイチ オツケウイチ ハカミヤーツカの
金庫あり 光古史ハ魯西亜文字を以て人を知る

一昨近をり

ニキタ ニコライイチ デミドフと ^シ 豪商 ペトルブルカ

お位存す 兄弟ふニコライ デミドフといふの

ムスクワお位すこれふ大富家をり

カランスタン オストロワと云 漆をあす ^多 一 都

よりみ里船隻五十三銅銭也

イルコツカの 船の 小川の 名をイルネースといふ

大河 アンガルといふ

ヤコツカよりイルコツカの 百ふキリキと云地を

カミシヤーツカ近きふ 千ギリ、ボリシヨレツカ

アクランスコ ふといふ地あり

カミシヤーツカ 近きふ キリーキス 千ヤフト ^{北の方}

硫黄山 ^{あり} ナキリース 南の方 アンデレスカ ^{北の方} これオシデ
レイツケあり

テツブロイポタ 温泉のりあり

彼ふの麻アサ、苧麻カラムシの類をて 丈短し 襦半服ハカマの

はく者及物皆は物を織る紙ハシ、大襦半等ハカマの

古手とあつめ晒して溜く也紙のまじりニジゴロトと
いふ玉より製し出す

胡瓜ハオグリチイといふバイカル湖畔の船場
ソモリヨといふ地より多く出す

サラナ 黒百合根

コレシといふ草を葉大かして根ハ牛蒡の如
しれを製する海あり我船着地亦産す江戸も
編し極して極海に薬園にもあり

臘脂ハ唐山より來る懐中紅なり与類へつける也
唇へ不附

仙臺漂客、彼玉の升、こけけすと、いかり光友曰
病を形  ぬけ作り極中すなりてある也

此方の一升少く飯合なり

彼國ブートといふ銅ハ此方の四角式十多
荷附るの荷物ハ八角目玉中の定法なり

ポリノイドマ ヒヤウミシコヤ 病院也

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and occupies the right-hand page of the open book. The characters are difficult to decipher due to the cursive style and the age of the document.

5

